

佳作

「ありがとう」を伝えた日

神奈川県 湘南白百合学園小学校五年 間馬 眞惟子

私のひいおばあちゃんは、千葉県にある父の実家に住んでいて、今年で九十八歳になります。数年前までは、和室と一緒に遊んだり、ミシンで縫い物をしてくれたりしました。でも最近、足腰が弱くなり、ベッドの上で過ごすことが多くなりました。歩くときは、歩行器を使ってゆっくり歩きます。

「一人で何もできなくなってきちゃって、赤ちゃんみたいでしょう。」
と笑うひいおばあちゃんを見て、私は少し寂しくなりました。

この夏休み、私は父の実家に帰省し、またひいおばあちゃんと会いました。今年は戦後八十年で、テレビでは戦争の特集が多く放送されていました。でも、私はこれまでひいおばあちゃんに戦争の話聞いたことがありません。父も、
「お父さんも一度も聞いたことがないんだ。辛い記

憶なんじゃないかなあ。」
と言っていました。

しかし、私は、学校の宗教の授業で、今も世界には戦争や紛争で苦しんでいる子ども達がたくさんいることを知りました。日本も昔はそうだったはず。そして、ひいおばあちゃんは、その時代を生きた人です。私は、ひいおばあちゃんに聞いてみようと思えました。

「ひいおばあちゃん、戦争の頃の話、聞かせてくれる？」

すると、ひいおばあちゃんはにっこりして、

「はいはい、何でもお答えしますよ。」

と言ってくれました。

話を聞いて、私は驚きました。女学生だったひいおばあちゃんは、毎日、空襲警報におびえて暮らしていました。学校でも勉強はあまりできず、神社に戦争の勝利をお祈りしに行ったり、なぎなたの練習をしたり、食べられそうな野草を探したりしていたそうです。いつもお腹を空かせていて、洋服や靴がぼろぼろになっても、どこにも売っておらず、新しいものを買うことができなかつたそうです。

「何しろ、勉強することよりも生活することに必死だったのよねえ。」

遠くを見つめながら、そう話すひいおばあちゃんの言葉には重みがありました。

私は、今までいつもにこにこしていて優しいひいおばあちゃんしか知りませんでした。でも、そんな大変な時代を生きてきたと知り、胸がぎゅっと締めつけられる思いがしました。私が今、友達と笑い合ったり、安心して学校に通えるのは、ひいおばあちゃんのように、戦争の中を強く生きてくれた人達のおかげです。平和な毎日当たり前ではない。感謝の気持ちを忘れず、私も平和を守っていける人になりたいと思いました。

ひいおばあちゃんは、今の楽しみは、私達ひ孫の成長を見守ること、と言ってくれました。ひいおばあちゃん、戦争の話を聞かせてくれて、ありがとう。つらい時代を一生懸命生きぬいてくれて、ありがとう。これからも体に気をつけて、長生きしてね。